

大方高校が野田村と交流授業

大方高校の1年生が12月22日(火)、岩手県野田村役場の職員と防災交流授業をウェブ上で行いました。

今回の授業は、「東日本大震災の被災者の方からお話を聞いてみたい」という大方高校の要望を受け、京都大学防災研究所の協力により実現したものです。昨年度から授業に取り入れている「未来へのメモワール」をテーマに、災害から守りたいものや大切にしたいものを見直し、何のために防災を行うのかを考える目的で実施されました。

当日は、野田村役場、大方高校、同研究所、町役場の4地点で中継され、同校の生徒によるメモワールの紹介や野田村役場未来づくり推進課の小野寺修一さんとの質疑応答が行われました。



ウェブ会議に臨む生徒ら

同校の浜田小町さんは、「被災された経験のある小野寺さんからお話を聞き、問題をより現実的に考えられたし、防災に対する意識がより高まった」と話しました。

大方高校生が避難路にベンチ設置を提案

大方高校の生徒らが12月15日(火)、大方バイパス沿いにある空き地へベンチを設置し活用してもらいたいと、国土交通省四国地方整備局と町役場の担当者へ提案を行いました。

提案をしたのは同校・地域創造コースの2年生6名で、昨年、地域住民とともに大方バイパスを経由する避難路の安全性を検証した際、同場所が津波浸水域外であることを確認したことがきっかけとなりました。普段から散歩の道として利用している高齢者も多く、日常における避難への意識付けにもなればと、土地の所有者である国交省と管理者である町への提案にいたしました。

同校の山口雷蔵さんは、「多くのお年寄りが散歩のコースとして利用しているので、休憩に使用してもらい、普段から防災の意識が高まれば」と話しました。



提案をする生徒ら

交流センター「みらい」開所式

旧佐賀保育所を活用した複合的交流施設「黒潮町立佐賀交流センターみらい」の開所式が12月23日(水)に行われ、関係者ら8名が出席しました。

同施設は昨年4月1日より利用が開始され、あつたかふれあいセンターや佐賀図書館、放課後子ども教室、下分地区集会所などの拠点として利用されています。

開所式では、松本敏郎町長より「施設の名称のとおり、子どもたちと地域の未来を切り拓く文化交流の拠点となってほしい」とあいさつがあり、その後、出席者らで施設の名称が書かれた表札の取り付けが行われました。

NPO法人はらからの川崎健太郎理事長は、「子どもたちと地域の人が自然につながり、関わり合っている場所になってほしい」と話しました。



表札かけをする出席者ら

ランドセルいよいよトンガへ

使わなくなったランドセルを集めトンガ王国の子どもたちへ贈る「ランドセルプロジェクト」が今年度も実施され、集まったランドセルを輸送するための梱包作業が1月13日(水)、町役場で行われました。

参加したのは、町小・中学校PTA連合会、町婦人連合会、大方高校生徒会など、関係者ら20名ほど。金具や肩ひもなどが壊れていないかを確認しながら布で汚れをふき取り、ノートやTシャツ、クリアファイルとともにビニール袋に入れ梱包しました。

参加した大方高校2年生の林周吾さんは、「トンガの子どもたちにはこのランドセルをたくさん使ってもらい、その後も次の世代へと引き継いでいってほしい」と話しました。



汚れをふき取る生徒ら

ランドセルは2月初旬に横浜港を出港し、3月初旬にトンガへ到着する予定とのことです。